

## 『特別編』

# 世界最貧国マリに寄り添う — CARA (西アフリカ農村自立協力会) を率いて30年 —

村上 一枝

日本歯科大学生命歯学部 名誉博士 (54回卒)

今回、これまで私の行ってきたマリ共和国の農村の人々への支援活動について紹介する機会をいただき、感謝致します。拙い文章ですが、これを機に発展途上国に生きる人たちの姿を改めてご理解下されば幸いです。

### ■ それまでの生き方を変える。48歳からのスタート

1989年8月31日で開業医を辞し、その後の生きる方向を転換した。それまで、西アフリカのセネガル、ガンビア、コードジボワールそしてマリを旅行した時、幼い子どもたちがいとも簡単に死んでいくのを目にした時の思いからだった。これは西アフリカだけではない、東南アジアもモロッコやチュニジア、エジプト、アルジェリアのマグレブや中東の国々、イエメンを旅した時も同様であった。わずかな支えや知識で子どもの命を救える、と思うとじっとしていられない衝動に駆られていた。

子どもたちを取り巻く衛生状況も激悪であった。世界遺産第一号と言われているイエメンの首都サナの街には、ごみと麻薬が渦巻いていた。散乱したゴミの中で、素足で遊んでいる子ども、それを注意しない大人たち、麻薬と言われるガートを噛み砕いてポップタを膨らませている少年たち。しかし横の建物では他の子どもたちがイスラム教のコーランを声高々に学んでいる。理解のおぼつかない幼い頃からコーランを体にしみこませているのかと思い、私は非常に恐怖を感じた。子どもの病気が多いことをガイドから聞いた時に、小児科医ではないが、子どもの命を守るため今まで得た知識を活用して何らかの手助けができるのではないかと考えた。

それから数年、「いつかは開業を辞めてアフリカへ行き、人々を助けることを私の人生における最終的な仕事としよう、家族のいない私には人生に残す物はない、必要とされる所に必要なことを残そう」と考えて過ごし、そんな気持ちのままに診療の休みの時には日本のNGO団体を訪ね歩き、情報を得て臨床を辞するチャンスを待っていた。ある団体では「国境なき歯科医師団」を作れば、などとも

言われた。

しかし私は、チャンスの来るのを待つのではなく、チャンスを作ることを考え、身体が健康であるうちに夢を実現することを決意した。自己資金が溜まってからではなく、「ナントカナルサ」、と思い行動が最優先であり、その先にきっと新しいことが待っている、と信じていた。48歳からのスタートであったが、今振り返るとかなり大胆だった。83歳の今はとてもできることではない、やはり若かったな、と自分を懐かしがっている。それから先は収入ゼロで、貯えを使い崩しての新生活が始まった。決心したら嬉々とした気分でマリへ行くことしか頭になく、母には唯一彼女が知るケニアに行くと言い、友に何も告げなかった。

### ■ マリを知るため、NGO 団体にボランティアスタッフに

1989年8月末日、開業医を辞め、同年10月にフランス語も話せないまま、サハラ砂漠が国土の7割を占めるマリ共和国へ旅立った。自分の考える支援事業を始めるにはそれなりの準備が必要と思い、最初は日本人の組織するNGO団体に修業をすることにし、ボランティアスタッフとして参加した。

団体側では、私は招からざるボランティアであったことに後日気が付いたが、それにはお構いなしに言われたことを実行していった。砂丘と、星空の美しい世界は安らかな気持ちを与えてくれるが、日中の気温が50度を超える日もある自然環境の厳しい中での生活に耐える日々であった。

サハラ砂漠の南端、いわゆるサヘル地帯と言われる地域のティンアイシャ村で11ヶ月、砂の上での生活が始まった。私が参加したNGO団体の事業は植林が主体だったので、私の「子どもの医療」という目的とは違っていた。しかし、この厳しい環境に住む人について知ることができた。水道も電気も、まったく公共の交通機関の無い地域、畑もないから食料もなく毎土曜日に開かれる市に商人が運



写真1 サハラの子からマリでの支援事業が始まりました。

んで来る食料を買って食べる村であった。診療所も薬もない、村にいる唯一の男性看護師が言った。「この村の人は働かないし知識も食べる物もない。病気になっても町までは130kmもある、何もできない」と。ここは早魃（かんばつ）から逃れてきた人を救援する村であったから、小学校へは、時々ユニセフが食料援助をしていた。小学校には給水用のポンプもあったが、砂嵐が起きて故障をきたした後は修理されていないようであった。

この団体に在籍して学んだ最大のことは、NGOとしてのあり方であった。つまり誰が誰に行う支援事業であるかという事である。身を粉にして働く日本人スタッフを見て、日本人のための事業なのか、アフリカ人のために行う事業なのかを常に考えさせられた。そして、支援とは支援側が「してあげるものなのか？」と。これも一つの支援であろうが、私はそれだけで終わるような支援ではありたくないと思った。この団体でのボランティア活動を11ヶ月で辞し、首都のバマコへ戻った（写真1）。

### ■ 人々が自立した生活を構築できる支援を目指す

バマコに着いてからは、日本人ではないNGOを探し、出会ったのが、マリ人が組織する「コマカン協会」というNGO団体で、2年間の契約でボランティアとして所属することにした。この団体が医療関連スタッフを探していたので都合が良かった。直ぐに現地のマディナ村へ行き、住み付いた。活動現地の村は、バマコ市から南西へ約230kmの村であり、ギニア方面への街道に面していた。余談ではあるが、村に生活してしばらくしたら、突然数人の日本人が目の前に現れ、日本語で話しかけられてひどく驚いたが、とても嬉しかった。彼らはマリとギニアの国境付近の鉱山を開拓する日本ODAのスタッフであった。

「コマカン協会」は、1990年に早魃（かんばつ）の被害から人々の生活を護るためにマディナ村の人々によって組織されたNGOで、その資金はカナダにあるオックスファームケベックと言う団体から助成されていた。これによって、食糧確保のために大きな貯水池を造成して野菜栽培と、牧畜事業を始めたばかりであった。私は、マディナ村の人たちが自力で食料難を逃れようと頑張っている姿と意気込みを強く感じた。

「コマカン協会」から私専用の住宅、と言っても円形の土レンガのかわいい家を与えられた。村に住む村人と同様な生活をしていく中、私が支援できることを探すため、人々の生活状況を知りたく全家庭の調査を行った。バンバラ語を理解できない私には、英語を話せるプロジェクトコーディネーターが常に同行してくれたので何の苦労もなかった。彼は珍しく大学卒業で獣医であった。幸いなことに、事務局長が、私が医療についての支援を目的としていることを理解し、自由な活動を許可してくれた。やっと目的の一步に近づきつつあることを感じた。

村での調査では、マラリアで苦しんでいる人が断然多く、子どもの下痢や体幹の痛みなどが訴えられた。子どもの頃から家事を手伝い、臼と杵を使うためなのか、背中が痛いと訴える子どももいた。2年間の「コマカン協会」滞在中に可能である支援を考え、衛生知識の普及や腸内駆虫剤の投与、乳幼児の3ヶ月毎の健康検査を行った。村には助産師が既に二人いたのも、彼女たちと一緒に活動を行い、大いに助かった。

また、女性の収入確保のために裁縫と刺繍、編み物や、子どもの衣服の縫製や女性用のアフリカ式衣服の縫製の仕方を教えた。まさかアフリカで裁縫の指導をするとは思わなかったが、自分の趣味を活かし、村の女性たちが収入を得ることができるのなら、本当に嬉しいことであると思っ

ていた。通常、村の女性達の収入は、トウジンヒエの粉で作ったパンケーキや栽培したピーナツや豆の販売、そして毎日使う調味料の小商いなどだ。しかし、農産物は年間の降雨量に左右され、一定した収入を得るのは非常に困難なため、他の方法で収入を得ることができることに、女性達は大張り切りであった。

畑の行き帰りに歩きながら刺繍や編み物をする女性もいた。縫い方を知った女性は、頼まれた衣服の縫製代金や、子ども用衣服や刺繍した製品の販売収入を得るようになった。毎日開かれる縫製教室には多くの女性が集まって来た。タバスキ（イスラム教の祭り）の前はみんな非常に忙しく、私の食事は朝、昼、夕とマンゴだけであった。電気がないので暗くなるまで作業し、休む暇もなく働いた。教室は活気にあふれ忙しくても楽しいものであった。誤魔化しや嘘を言って楽をしようとする女性には、私だけでなくみんなが声を揃えて非難し、時には副村長が謝りに来て、「ムラカミ、日本に帰らないで女たちに教えてくれ」と懇

願された。疲れもしたが、楽しい日々であった。

そのほか、小学校、イスラム学校を復興させた。村から去る前年に計画し、村待望の診療所を建設し、看護師と新たに一人の助産師を育成した。この診療所が華々しく開設、その結果、村を出て他国に移住していた人が村に戻り、当初の人口750人から1350人に増加した。今ではこの郡の中心の診療所となっている。小学校の復興は、中学校の開設に至り、日本外務省の資金で2度も教室を増設した。後日、村を訪問した時、女性たちが縫製や刺繍で収入を得て、なかには村の市場で中古ミシンを買い、縫製の仕事をしている女性もいて、これまでの支援が人々の生活に活きていると感じた。

これらの結果を得たことは、私の希望を活かして自由な活動を許してくれた事務局長とコーディネーターがいたからだ。初めて村にきた東洋人の私を気持ちよく受け入れてくれた村の人達が真摯な気持ちでプロジェクトに参加してくれたおかげである。支援は資金を出す側が中心ではな



写真2 マディナ村に開設した診療所。AMSM JAPON はカラと改名する前の団体名称です。



写真3 マディナ村での村上の宿舎



写真4 ミシンの使い方を村の女性に指導

い、理解してくれる人がいて資金と人との調和のとれた良さがあったこそ、成果が見えて来ると思った。

これまで経験した二つの村での泣き笑いの体験から、私の目指す支援事業は、緊急時に支援するような一時的なものではなく、温暖化が進み、自然環境が悪化し、農作物の収穫量が減少する状況でも、出稼者を最小限に留め、他からの支援に頼らないで自立した生活を構築すること事を目的とすることである。そのため支援する側は、支援対象とする人を良く知り理解することが肝心である。また同時に支援する私側の理念も絶対に曲げてはいけなと改めて思った。私自身も村で過ごした2年間から、常に人種や国境を越えて本音で忍耐強く話し合うことが理解を深め、信頼関係を築く基本であると感じ、それが支援の成果に結びつくという確信を得た。確かに日々の生活は日本人と比較すると貧しい。だからといって卑屈でもなくプライドを持って生きている。そのような人々にお世辞も施しも不要であり、隣に住む友人と思うことが重要であると思った(写真2～4)。

### 自ら「西アフリカ農村自立協力会」 (CARA：カラ)を立ち上げる

3年間の修業を終え、いよいよ夢実現へのスタートである。まず、会の名称を『西アフリカ農村自立協力会』とし、フランス語訳から数個の文字を使ってCARA(以後カラと称する)とした。私は、マリで事業を始めるには絶対的にマリ人の知恵や手助けが必要と思い、コマカン協会の事務局長である、ジャワラ氏にカラの渉外担当と私の帰国時には代表代行となってもらおうようお願いし、心良く了解をもらい、百人力を得た気持ちであった。私はジャワラ夫人とも親しくなり、夫人の主催するバマコの女性団体へ個人的に女性作業センターを建設して寄付した。

1994年、バマコ市内に事務局のために1軒家を借り、日本人スタッフの宿舎にも併用した。場所はバマコ市内で空港に近く、もしも有事の場合には街なかの橋を渡らないですぐに空港に行ける場所を選んだ。理由は、マリでクーデターが発生し、市内の大型商店や政府高官の邸宅が焼き討ちにあい、市民の日常生活が危険にさらされた経験があったからである。電話の契約、銀行口座の開設、郵便局の私書箱も開いた。警備員も2人雇用して、24時間体制の警護とした。やはり外国人の住む家は色々な人から狙われると言う。そのためもあり、目立つことは避けた。これらの細かい注意も作業も全てジャワラ氏が手続きをしてくれたおかげで、早く確実に行うことができた。私の未熟なフランス語でウロウロすることなく、順調に事務所としての形が整えられて行くことに感謝し、大満足であった。

最初の難関は、フランス語によるマリ国内での外国籍

NGO団体としての活動許可をマリ政府内務省から得るために、その申請書を作成して申請することであった。この書類作成もマリ人に頼めばすぐにはできるが、絶対的に私には無理であるが、内容を知りたくて辞書を片手に理解に努めた。提出用の書類は、最終的にはジャワラ氏が作成して内務省へ提出してもらった。彼はバマコの旧家の子であり、とても顔が広く、多くを経験しているので、役所に行き、ヤアヤアとの挨拶で早く済ませたようであった。申請書提出から数ヶ月を得て、1994年3月にマリでの支援活動の許可を正式に貰った。

### バググ村での支援を始める

当初カラは自動車を持っていなかったのが自動車を使い、運転手を雇って支援事業の対象村を探して廻った。村選考の条件として、これまで支援の入ってなかった村、公共施設の無い村を念頭に置き、バマコからあまり遠くない200km前後の距離の村を候補地と考えた。

多くの村を視察して気が付いたのは、村には老人と子ども、そして女性がほとんどであった。老人に尋ねると、「男は出稼ぎに行った」と言う。故障した井戸も修理されなままであり、畑も見当たらず学校や診療所などもまったくなかった。首都からさほど離れていないにもかかわらず、街道を一步入るとこのような村ばかりであり、言葉は悪いがまさに貧困の極み、と言えるような状況の村であった。このような村にこそ支援が必要だろうと思ったが、車の無い我々の団体には無理であると思い、諦めた。支援は感情だけで始めるのではない、支援する側の責任もあるのでキチンとした体制が整っていなければいけないと思った。

日本のNGO団体として初めて支援活動をする村に、カラのマリ事務所のあるバマコから約200km北東の人口650人のバンバラ族の住むバググ村を選んだ。街道から3km東に入った村で、村の中央には常時水をたたえている井戸があり、村長が言うには「100年前からこの井戸は涸れたことがない、だから人が集まって村が出来た」と言った。村長に我々の団体の紹介をして村にきた目的を話し、支援の必要か否かを考えてもらった。我々はその夜は村長の好意で村に泊めてもらった。村長は村民会議を開き、支援してもらうことに決めたと翌日連絡があり、この村での活動の許可を貰った。1994年4月の事であった。

このバググ村にローカル事務所を立ち上げ、スタッフもマディナ村から既に育成していた助産師1人と農業・識字教師の男性をリクルートし、さらに日本から農業技師の女性1人を雇用し、私を含めて4人が村に住みついた。村では我々に村人と同じ土レンガの宿舎を建設してくれた。誕生したばかりの団体では資金が乏しく、ほとんど私費を費やした。何についても経費が必要であり、たとえ村のため



図5 スタッフとの打ち合わせ



図6 村人へ十分な説明をする。



図7 生活用水確保のため井戸を掘削

とはいえ無料の労働奉仕では人々の協力は得られなかった。

バブグ村の村長に頼んで5人の若者をリクルートしてカラのアシスタントスタッフに雇用した。それは彼らには将来村の指導者になってくれよう願ってのことであった。その中の1人だけがかろうじて文字が書けたが、他の4人は文字の読み書きができなかった。最初の仕事に地域の3ヶ村の全家庭の健康・衛生状況の調査を行った。その結果はやはりマラリア罹患者が一番多く、他は圧倒的に薬が欲しい、子供が病気になった時に診療所がなくて困る、女性は畑が欲しいと訴えていた。調査結果から、診療所開設とマラリア予防を立案して早速実現へ向けて進めた。マラリア予防はバマコから薬剤を購入すればいいが、診療所の開設は困難であった。それは、村の産院診療所で働くのはその村の助産師でなければ継続できないと思っていたからである。なぜなら村の女性たちは、他所から来た女性を容易に受け入れる情がうすく、常にトラブルが生じると言う。しかしこのバブグ村には助産師や看護師の育成に可能な人材

がいなく、国の育成機関は高等学校出身資格が条件であった。地域に小・中・高等学校が無く、卒業した人など全くいないのである。矛盾した話であると憤慨したが、諦めざるをえなかった。このような事情で、産院診療所の開設はお預けになった。

バブグ村では、種々な支援事業を開始した。カラは人々が要求することをそのまま与える団体ではない、すべて村の人の力で作り上げるのを手伝う団体であることを折に触れて力説した。そして日本から資材は持ち込まない、全てマリにあるものを使い、マリの技術で行うことをモットーとした。井戸を掘り、美しい畑が造成され、並木が造られていった。小学校が無いので、識字教室（日本の寺子屋式）も建設し、村人は部族語の読み書きと算数を学んだ。これらすべての支援事業は、村の人達の習慣的行事や農業サイクルに合わせて順次行っていた。バブグ村の1haの野菜園から野菜が生産されると、それまでまったく交通機関が無かった村に、1週間に2回バマコから定期バスが運行されるようになった。

このバブグ村にカラは2000年まで滞在し、周囲の村々の自立の状況を見極めて、他の地域へ移る事とした。バブグ村を中心に関わっていた村は57ヶ村であったが、全ての村の意識がかなり違っているから、同じ事業を村々に実施したわけではない。当初は、自立に無関心な村の方が多かったかもしれないが、良い状況が伝われば、必ずそれを真似る村が出てくることを期待していた。

その後、2007年にバブグ村の要請で小学校を建設し、2014年には村の助産師が誕生し、産院診療所が開設された。ゆっくりと長い年月を有した発展でもあり、やっと村人の希望が達成されたのである。現在はカラがこの地域に開設した11ヶ村の産院診療所では、1、2位を争う収益を上げている。もちろん村の委員会の運営管理によるものだ。

一連の事業を通して早く確実に成果を上げるのは、収入を得やすい事業である。その例は、数ヶ月で生産販売される野菜栽培や、日々の生活に役立つ女性適正技術から得た製品の販売収入であった。これらから今まで収入がなかった女性が、確実に収入を得る道を知ることになった。収入を得る事を知った女性は自信を持ち意識も変わり、更に事業の進展に興味を持ち、積極的に行動を開始してくる。当に女性を上手く動かすことが村の自立発展につながる事のようにである（写真5～7）。

## より厳しい環境で、さらに支援の幅を広げる

バブグ村の次の支援事業候補地を探った。そしてより北方の自然環境のより厳しい地域に決めた。

バマコ事務所から300kmでさらに遠くなり、道路も激悪で雨季には車が立ち往生するのも度々のことであった。しかしこの地域は自然環境が素晴らしかった。バブグ村とは空気が違っていた。これは植生が異なるからだと思う。人々はバンバラ族ではあるが、バブグ村周辺の人たちとは意識がかなり違っていた。何事につけても理解が早かった。驚いたのは、どうしたらカラが村からの要請を受け入れてくれるか、カラの操縦方法を知っているようであった。バブグ村で実践していた状況が人々を介してこの地域の村々に行き渡っていたようであった。人々は賢く、理解が早く、カラに非常に積極的に協力的であった。

この地域の中心的な事務局をコニナ村と13km離れたモバ村に置いた。私専用の家もあり、多くの日本人の訪問もあった。この地域では基本的に27ヶ村を支援したが、他にかなり遠くの村からも多くの要請があり、そのような村からは代表を呼んで指導するようにした。支援内容はバブグ村地域と同様であるが、さらに水不足が深刻で、多くの井戸を掘削したが、容易に水が出る村が少なかった。その分経費が掛かり資金面ではかなりの苦勞であった。畑も森林帯の造成、女性適正技術の指導も活発に行われていった。

この地域の村には、村人が過去に建てた土レンガの小学校が多く、それらは崩壊寸前で危険な状況であった。子どもたちが安心して学べるように、改築工事を行った。人びとは教育に熱心であるように見受けられた。

この地域にきて新規に始まった事業もある。それはエイズ撲滅事業、女性小規模貸付事業、村の助産師育成と産院診療所の開設、女性健康普及員の育成と学校建設や森林パトロール隊の編成である。

エイズ撲滅事業は、出稼ぎ者の帰郷する時期にキャンペーンを賑やかに祭りのように実施し、エイズについての正しい知識を普及することに努めた。女性小規模貸付事業は、女性委員会で蓄えた元金を何人かの女性に決まった期間貸付ける。2001年に2ヶ村から始まり、今は20ヶ村近くで継続している。これらの運営も全て女性達で実施している。このコニナ村近辺には小学校を中退した女性が何人かいるので、村の助産師育成にも苦勞が無かった。27ヶ村中に1ヶ村に政府管理の産院診療所があるが、給料の不配や薬品の不足もあり、休診が続いているので病人が出ると祈祷師に頼むだけであった。祈祷師が病気を治せるわけではないので病気の問題はかなり深刻であった。村から助産師が誕生したことは、女性の将来に大きな夢を与えた結果、小学校への女児の就学率が男児を上回ってきた。また、字を知らない成人女性たちではあるが、カラの研修で頭に叩き込まれた知識で病気予防や公衆衛生の普及に努め、下痢の子どもがいなくなった。ユニセフの予防接種が100%となったこと、家族計画には夫婦揃って相談に来るようになり、人々の意識が非常に変わって来た。これは、村のおばさん主体の「女性健康普及員」の成果である。

都会から来た薪炭業者が禁止されている森林伐採を、現金をちらつかせて伐採させるので、森林減少を考慮して、森林パトロール隊を編成し過剰伐採や森林火災を防ぐことにした。夜間に自分の村の見回りをして村の森林を護るのである。この結果、確実にこの地域には薪炭業者が来なく



写真8 公衆衛生の学習会



写真9 マラリア予防を促す掲示板



写真10 マラリア予防の投薬中



写真11 完熟したキャベツに大満足の女性



写真12 村の助産師の診察



写真13 オバサン保健普及員の活動

なり、森林火災も減少した。この活動は本来、マリ治水森林局の仕事であるが、有効に機能していないのである。

種々の事業を同時進行で進めてきて、2015年頃にはカラの目的である村の人たちの自立する姿勢が見られ、そろそろ支援事業も限界にきたと感じ、全てのスタッフを解雇し、前線を退くことにした。その頃はまさにマリ政府に対する軍部の不穏な動きが高まり、危険な状況になってき

た。2017年頃からは村のアシスタントスタッフ1人を連絡係として残し、現地を撤退した。村の人達は、我々がなくなった後からが、彼らの真の自立の道を進むことになる。私は、2019年にマリに行ったが、残念ながら安全上の理由から、村々を訪れることを在マリ日本大使館から厳しく禁止された(写真8～13)。



写真14 マリのカラ事務所ではジャワラ氏と

### ■ 支援の功罪、これまでの反省も込めて

支援を続けていて当然良いことばかりではない。私は支援ということ学ばないでこの仕事に飛び込み、経験をもとに現場を見ながら考えて活動を続けてきた。そのために、事業の立案には、それが的確であるかどうか常に不安であった。事業の結果を見て功罪を判断していた。

最大の失敗は、初めての支援事業をバブグ村に集中的に展開していったことである。これを見た周囲の村から強い嫉妬を招いたことであった。まさか、嫉妬など、とは思っていなかったが、スタッフに聞いて驚いた。周囲の村との親睦を図るために、カラカップと称してサッカー大会を開催し、2回連続してバブグ村が優勝したのでさらに人々のバブグ村に対する嫉妬は増大していった。「カラはバブグ村だけを可愛がって、他の村を嫌っている、バブグ村には悪魔が住んでいる」という噂が広がってしまった。3回目のサッカー大会では試合が始まる前から、一人の青年がコート周りをブツブツ何かを唱えながら全試合が終わるまで廻り続けていた。不審に思って聞いてみると「悪魔除けを唱えている」という。この経験から次のプロジェクト開催地区では、ローカル事務所を13km離れて二つの村に開設し数ヶ村に同時に支援事業をスタートした。

事業の結果が罰とにならないことを考え、その見極めは非常に大変であった。つまり「やりすぎ」はいけないし、「やり足りなさ」も問題がある。だからと言って村の人の要請をうのみにすることは、人々の自立をそぐ結果になると思って支援の塩梅に気を付けることであると反省した。私が行って来た支援事業は、日本の3.3倍もある広いマリ共和国のほんの一部にしかならないが、成果が彼らの生活にメリットを与えている物であれば、それは無言のうちに広がり、生活に適したように改善されていくであろう。私は

彼らに大きな期待を持っている。

もし支援事業で一番重要なことは？と尋ねられたら、即座に「忍耐」と答える。多くの意味での忍耐である。更に、自分が村に住むアフリカ人であったら、と考える事である。そこから考えられることが支援に通じると思っている。

最後に、1994年に日本の大学生13人が教授に引率されてスタディツアーでマディナ村へ来たことがあった。

そのツアー最終前日、マディナ村村長の依頼で隣村へ学生数人と私と教授が招待された。その村には第一正装の長老たちが並んでいて驚いた。それは、マディナ村と周囲11ヶ村が長年続いていた仲たがいを解消する儀式だったのであった。仲たがいは、マンゴの生産が盛んなマディナ村を妬んでの理由であったらしい。しかしマディナ村に多くの外国人が来るのは、尊敬に値する村であるということを知り、それまでの仲たがいを解消するに至ったのであった。私は人々の素朴さに微笑まじさを感じた。

### ■ 最大の協力者であったジャワラ夫妻について

ジャワラ氏は、1993年以降、彼が2017年に現役のまま病死するまでの長期間にわたって、カラに尽力してくれた。彼の存在がなければ、今の成果を収めることは出来なかったと深く感謝している。非常に教養の高いマリ人夫妻に偶然に出会い、協力を得たことが、私が目指した事業に多くのチャンスと成果をもたらした結果になったと考え、とても幸せなことであった。

一族に住むマディナ村のNGOであるコマカン協会を創立し、事務局長を務めていた。また居住地区の長期的な存在で、発展途上国の医療システムであるセスコムという市民の運営管理による診療所の代表を務め、地域医療に大きく

---

貢献していた。ちなみに、このセスキムのシステムでマリ共和国に開設された診療所第一号は、日本政府からの資金援助でバマコ市に開設された。私はその実現に協力した。

夫人のカジャトウさんは、マリ国費フランスへの第一期の女性留学生であり、助産師の資格を持ち、マリで家族計画を最初に普及した女性であった。

マリに駐在していたODA、NGOを問わず、多くの日本人がお世話になっていた。

## ■そして今

約30年に及ぶ村民自立のための支援事業は、一応のめどが立ったとみられるので、現在、現地から離れていることは前述の通りである。

この30年間は、ひたすら資金の獲得と事業の進行に気を配り、さらに日本人と意識の異なるアフリカ人スタッフに気を遣う日々であった。それらから解放されたものの、頭に浮かぶのは、村民たちが自立できるようになったとはいえ「まだ村には識字教室が、診療所がない」ことだ。幸いにも日本には支援してくれるカラの会員の方々がいて、そ

の支援に頼って細やかな建設事業を行っている。中原 泉理事長を始め、多くの日本歯科大学の同窓の先生方のお世話になっている。この場をお借りして深く感謝申し上げる。

私が発展途上国の現場で働くようになって強く感じたのは、発展途上国となるのも、先進国となるのも、それは人為的に生まれた結果であるということ。そして、先進国では合理性や便利性が追求され、経済性が高まった結果、考えることや努力すること、周囲に気を遣う意識を失ってしまったように感じている。

そのようなことを考えると、先進国とはどのような国を指すのであろうかと思う。アフリカの人々の生活が貧しいと一概に言えるのだろうか？ 我々のようなモノに埋もれた生活と比べると、彼らの持つ道具は非常に少ないが十分に日々生活している。そして、アフリカの人々が持つゼロから努力して作り上げる力は非常に高いように感じる。彼らは、果敢に未来を切り拓いて行くと考えている。

アフリカでの生活で目にし、耳にしたことから得た多くが、今では私の貴重な財産となっている。